



テープカット
左から加藤氏、遠藤氏、田上氏、深掘氏



挨拶をする龍之介氏

東京委員会のメンバーでもある加藤宗哉氏は『沈黙』は発刊当初、反発も多かったが現在では全世界で認められ、今もなお増刷されている。遠藤周作は早く来すぎた作家で、やつと時代が追いついてきたのだと思う。これからも時代を超えて遠藤作品が読み継がれてゆくことでしょう」と述べた。

行われたオープニングセレモニーには、長男の遠藤龍之介氏をはじめご家族、ご親族、長崎、東京などから駆けつけた関係者が列席した。

まず主催者を代表して田上富久長崎市長（当時）は、遠藤周作が生前「長崎は僕のために神様が残してくださった地だ」と語っていたこの地を選んで文学館が設立されたことへ感謝を述べたあと、「時間をかけて準備したこの

企画展で100歳の遠藤周作に出会い、その人生をおいかけていただきたい。世界中からメッセージを戴いたこと、ご尽力いただいた皆様への御礼と訪れてくださる方々へ歓迎を申し上げます」と語った。

続いて遠藤龍之介氏は、人生の4分の3を一緒に過ごしてきて様々なことがあったが、小学生の頃『沈黙』の取材旅行でこの地に同行したことを思い出し、「長崎との出会いがきつと心の支えになっていたのだと思う。この企画に感謝すると共にこれを、多くの人に見て戴き、父を思い出してほしい」と挨拶した。深掘義昭長崎市長は『沈黙』という小説を通して、「遠藤周作生誕100年の節目の年に、市議会も改めて長崎市を活性化して行きたい」と語った。



普段展示されていない部屋も使われて

セレモニーの最後にレコードに残されていた遠藤最愛の母、遠藤郁氏の歌う「アベ・マリア」が場内に流れた。記念展開会のテープカットのあと展示室の扉が開かれた。

展示「100歳の遠藤周作に出会う」は、全ての展示室を使用し、作家遠藤（次頁に続く）

遠藤周作生誕100年特別企画展

周作クラブ会報

（第91号）
2023年5月25日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

報告・遠藤周作生誕100年記念展 1～2面
遠藤周作文学館便り 3面
周作クラブ長崎便り 4面
連載・樹座の30年 5面
原稿発掘 6面
私が選ぶ遠藤周作この作 7面
お知らせ欄 8面

「100歳の遠藤周作に出会う」

長崎ではじまる



展示物を見る龍之介氏と田上氏